

## 「戦争と平和」の舞台を訪ねて

### 人生と歴史への無限の教訓

6月の半ば、モスクワとサンクトペテルブルクを訪れた私は、最初にトルストイが生まれ育ったヤースナヤ・ポリャーナに足を伸ばした。

モスクワから車で南下すること約200キロ。「トルストイの邸博物館」は、入口の門から美しい白樺の並木を通り、新緑の木々と花々に囲まれた中であつた。白い板壁の2階建ての家が、今は博物館となって当時の模様を伝えている。トルストイはここで生まれ育ち『戦争と平和』をはじめ多くの作品を執筆した。無名を好み死後についても遺言したというトルストイの墓が、そこから歩いて5分ほどの森の中にあつた。幅1<sup>メートル</sup>、長さ2<sup>メートル</sup>、高さ50<sup>センチ</sup>ほどの長方形に土が盛り上げられ、上を雑草が覆っていた。文字通り、世紀の文豪にしてはきわめて質素な墓だつた。

翌日はモスクワ市内にあるトルストイ博物館へ。1階建ての各部屋ごとに『復活』『アンナカレーニナ』『戦争と平和』関連のオリジナル原稿や、校正のためペン字で手を入れた活字紙面が展示されていた。長編『戦争と平和』には、あらゆる哲学や思想、箴言が含まれていて、とても簡単に論ずることはできない。ここでは自分が特に感銘を深くした5項目だけ上げてみたい。

以下、引用は「世界文学全集 20巻・21巻 集英社版 原久一郎訳」から小説の流れに沿っての引用である。

I 戦場で倒れたアンドレイが、草原に傷つき倒れて空を見つめながら考えつづやいた言葉。

「ただ彼の上には高い空——晴れてこそいないが、高い空と悠々と過ぎゆく灰色の雲があるばかりであつた。『なんという静かな、平和な、崇高なことだろう』・・・」

そう、戦争の悲惨と戦場の喧騒に対して、見上げた空のなんと高く悠久なことか。空を見上げているなかで、現実の世界も見下ろせるような境涯にもなっていくことが感じられる。

II ナポレオン軍に捕らえられたピエールが、流刑地のシベリアで農民カラターエフとした語らい。

「ただ一人、プラトン・カラターエフだけはピエールの心にもっとも強烈で貴重な追憶として、またロシア的で善良で円満なもの一切の、権化として永久に残つたのである」

第2巻の最後の解説部分で、翻訳者は「カラターエフをロシア的円満の象徴」としている。実際にカラターエフは小説の主人公の一人、ピエールの心を根底から変えていったのだった。

III 13歳で登場するナターシャの瑞々しさと恋に悩む姿。やがて結婚し子だくさんの良妻賢母になっていく経過も物語の縦糸として読者の心をつかんでいく。

「この日から、アンドレイ公爵は、ナターシャの許婚者として、ロストフ伯爵家へ出入りするようになった」

「ナターシャは、注意深く相手の手をとると、その上に顔をかがめて、かすかに唇をつけて

接吻し始めた。『おゆるしくださいませ！』……『僕はあなたを愛しています』とアンドレイは言った」

「ナターシャは 1813 年の春の初めに＜ピエールと＞結婚し、1820 年にはすでに三人の女の子と一人の男の子を持っていた。……今度は自分の乳をやって……すべてが母親化していった。……彼女の魅力の変化……家庭では夫に対して、奴隷としての地位に甘んじていた」

制作会社の異なる 2 本の映画で見たヒロイン・ナターシャは、どちらも原文の通りはつらつといて瑞々しく惹きつけられたものだった。翻訳者の解説によれば、「ある意味では、ナターシャは、トルストイの描いた女性の理想像と言えるだろう」としている。

#### IV ナポレオンのモスクワ侵攻と炎上、そして冬将軍の中でのフランス軍の絶望的な退却行。

「モスクワは住民に焼かれた——これは事実である。しかしながら、そこに残った住民ではなく、退去した住民によって焼かれたのである」

「ナポレオンはモスクワ付近の華々しい戦勝の後に、意気揚々とモスクワへ乗り込んだ。戦場が自軍の手中に落ちたところからいって、勝利には一点の疑いもありえなかった」

「攻勢に出れば負けるだけだということくらい、彼らも解していいはずだ。忍耐と時間——これが私の戦場の勇士だ！」とクトーゾフは考えた。林檎は青いうちに採ってはいけない。

「あのきちがいじみたヒステリックな彷徨。当時のクトーゾフさえ思いも及ばなかった、フランス軍の全滅を実現させたのである」

「フランス軍のモスクワ退去という報告から戦争の終わるまで、クトーゾフの全活動は、ただ一事に集中された。ほかでもない。権力と機知と懇願によって机下の軍隊を抑制し、無益な正面攻撃や、迂回運動や、自滅しつつある敵との衝突を回避させたことであった」

第三編でトルストイは戦争の勝者と敗者について解説している。——ボロジノの会戦と、それに続くフランス軍のモスクワ占領、その後、一戦もまじえずに行われたフランス軍の潰走は、歴史上のもっとも教訓的な現象の一つである。モスクワ近郊の百姓たちが、各自の乾し草をみんな焼き捨て、フランス軍に渡そうとしなかったからである。

霜が降り始めて以来、フランス軍の潰走はいよいよ悲劇的な性質を帯びてきた。兵士たちは凍え死んだり、焚火のそばで焼け死んだりしている。だのに皇帝や王や大公たちは、深々と毛皮の外套にくるまり、略奪した財宝を持って、幌馬車に乗ってゆくのだった。彼らは軍のことを案じているようなふりをしていたけれど、その実、自分一個のこと——どうしたら少しも早く逃げ出して、身を全うすることができるかということ——だけしか考えなかった。

——トルストイはここで、まさに戦争の不条理と人間の心の奥を鋭く描いている。

#### V 小説の各所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」「死とは?」……トルストイは

人間と社会の根源的な課題へ言及している。

——「ねえ、あなた」とリーザは一人の将軍のほうへ顔を向けて同じ調子で語をついだ。「たくの主人はあたくしをすてて戦地へ行こうとしているんでございますの。あたくしをすてて戦地に死ににゆこうとしておりますの。ほんとに、何のためにこんなうとましい戦争などというものが行われるのか……」

「……おれが目標なのかしらん？ おれのほうへ駆けてくるのだろうか？ 何のためだろう？ おれを殺しにか？ おれを、みんなから熱愛されているこのおれを？」

「……欲望のうちにはなくて自分の心中に幸福をお求めなさい。幸福の泉は外部からではなく、内部にあるのですよ……」

「幸福とは他人のために生きることにある……」

「やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れ果てた者や、ためらっている者の上に、小雨がしとしと降り始めた。『おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！ やめてくれ……いい加減正気に返ったらどうだ！ お前たちは一体何をしているのだ？』。こう言っているかのようであった」

第四編では、戦争、殺し合いの不条理、生死について解説をしている。トルストイは、文明というものが進めば進むほど、むしろ人間生活をゆがめ、魂の生活を損ねるものだという結論を抱くようになった。昨今の時代状況と人間の幸せについて思うと、私もまったく同じ思いを抱いているところである。

私は、侵攻したナポレオンがモスクワ市内を遠望したという雀が丘に立ってみた。高さ 100 ほどの丘からはモスクワ市のほぼ全貌を望むことができた。丘の上の広場は数百人の観光客やみやげ物店で賑わっていた。真っ白のロングドレスの新婚の花嫁が新夫と熱いキスを交わし記念写真におさまっているカップルをいくつも見た。これこそ、先達が戦争で命を犠牲にしながらか勝ち得てきた尊い平和のありがたさだと思う。

半世紀前、高校時代の夏休み前に、国語の担任の先生から言われた。「世界文学の大作を読みなさい。今はすべてわからなくてもいい。自分が偉くなったような気分になるよ。きっと……」。そんな言葉に刺激されて学校図書館から借りてきて読んだのが『戦争と平和』だった。

『戦争と平和』は 1865 年から 1869 年にかけて発表された。19 世紀前半のナポレオンのロシア遠征（ロシアでの呼称は「祖国戦争」）などの歴史を精緻に描写しながら、ロシアの貴族社会や人々の多様な生き様を綴っていて、登場人物は 500 人を超えている。

ロシア訪問を前に、私は地元の図書館から上下 2 巻を借り再び読んでみた。だが、難しさはそれほど変わらなかった。今も消化不足は否めない。でも、作品の舞台めぐりは、偉くなったような気持ちこそにはならなかったが、心は少しだけ豊かになったような気がした。